慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古島敏雄著「土地に刻まれた歴史」
Sub Title	History etched in land' by Toshio Furushima
Author	中井, 信彦(Nakai, Nobuhiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1968
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.8 (1968.) ,p.75- 76
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069957X-00000008-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古島敏雄著「土地に刻まれた歴史」

'History Etched in Land' by Toshio Furushima

中　井　信　彦

Nobuhiko Nakai

（1）

戦後の日本農業史，土地制度史の研究の上で果してきた古島敏雄氏の役割の大きさについては，今さら多言を要しない。その氏が，多年の蓄積の上に，想をこらして新しい分野に鍬を入れた第一作が，ここに紹介しようとする「土地に刻まれた歴史」なのである。

氏の新しい試みは，いってみれば「新しい民俗学」への途である。氏は次のように言われる。

「私がこの本で問題としようとするのは，日常的な生産・生活の営なみのなかで，長期にわたって労働を投下しつづけ，少しずつ自然の様相を変え，人間生活に適合するものとしてきながら，その過去の努力の忘れさられている側面に眼を向けようとすることである。」(9 ページ)

歴史のどの段階をとってみても，人間は常にそのなかで生きている自然に対して働きかける。ブルトーザーのうなりと共に，山がけずられ，道路や宅地がつくられ，工場が建てられていく眼前の変貌は，経済の高度成長と高い技術発展に支えられた，現代の人間の自然への働きかけに他ならない。それほどに急激でないまでも，自然は人間の永い努力の積み重ねによって，数多くの変化をうけてきた。しかも，その変化の多くが長年月にわたって徐々におこなわれたが故に，たとえば平和な田園の風景やそこに流れる小川のせせらぎを，ややもすれば自然そのものであるかのように思い違いして，それまでに注ぎこまれてきた巨大な努力を見逃しがちなのである。農業用水を例にあげて，著者は次のように述べている。

「取水施設や用水路を通る水は，自然河川を流れる水とはちがって人工の加った水である。農業用水と同じ形式で取水し，浄水場施設だけを余分にもつ今日の上水道の水は飲用水・工業用水その他に使われる時，人工の加った水として使用量に応じた料金をとられ，従って水は価格をもった商品と考えられている。発電のために利用される水は発電権を与えられて発電業者の排他的利用が認められる。これに対して，同じように資材・労働の投下によって用水路に導かれる農業用水は旧来の利用関係が慣習として認められるにすぎない。農業用水路がなければ水の導かれない土地であっても，一つの用水路が使いあました水は，下流民は無料で利用するのを当然としているし，取水前の水は公の支配に属するものとして，公共の立場で処理しうるものとされている。それだけでなく，時にはこの水を利用している農民たちさえも，自然物を，水の自然の性質に従って利用していると考えている例に出あうことがある。(8 ページ)

ところで，人間が自然に対して働きかけるというとき，対象となる自然は常に選ばれた部分である。その選択は，時代の政治・経済的な必要と，動員しうる労働力の量や技術の程度などにもとづいて行なわれる。現に進められている自然の変容はめざましいものであり，古い景観は急速に改められているけれども，それでもなお，求めさえすれば，多様な時代にわたる自然に刻まれた歴史の景観を眼にすることが，今のわれわれにはできるのである。「このことはかって民俗学が同一時代に平面的

に残存している人間現象から，変化・発展の系列を発見しようとした時と同じような事情にある。」民俗学が対象としたような生活や意識の慣習的残存は，交換経済の展開や教育の効果，またマス・メディアの影響，世代の交替などによって殆んど消え去ってしまった。それに比べるなら，景観の片隅に残る古い姿は，より広汎に残存しているといえる。

庶民の日常的な生活の歴史は，それを文献史料によって知り得る範囲はきわめて限られたものにすぎない。ただ，過去の人間が自然に働きかけたあとは，その後に加えられた変容を伴いながらも，より多く残されているのである。それらの遺跡には日付けがついていない。しかし，それぞれの時代の人々が，自然に働きかけるために使った道具の質量や，動員しえた人間の数や労働組織の性質など，諸条件のうちのいくつかは従来の歴史研究によって明らかにされてきている。著者自身，それらの歴史研究に目ざましい業績を挙げてきたのである。それらの歴史知識を駆使することによって，遺跡の属する歴史段階のおよそを知ることができる筈である。
そして，そのような遺跡の復原をとおして，逆にそれら自然変化の時代性や加工者の性格をさぐることによって，過去の政治・経済の社会的状況を把えるための手がかりも得られる筈のものである。

「土地に刻まれた歴史」のねらいは，およそ右のようなものである。文献史料の語り伝えることのない過去の人間の生活圏や技術水準・労働組織などを，国土の景観からさぐりあてようとしているのであって，今日も生きている残存を資料をするという意味で，評者はかりに「新しい民俗学」と呼んだのであるが，見方を変えれば一種の歴史地理学ともいえるかもしれない。

(2)

具体的な試みは，大和平野と能登半島北海岸とを中心に行なわれている。清新・平明な「ねらい」から本篇に読みすすむにつれて，叙述は詳細にわたり，航空写真の利用や豊富な挿絵写真（そのほとんどが著者自身の撮影にかかる）に助けられつつも，通読には意外に骨がおれる。

しかし，例えば大和平野周辺の山麓部と平野中央部とを，丹念に実地調査を重ね，考古学・古典文学・歴史学の知識を動員しつつ，水田の水がかりに注意を集めて，湧水を利用した沢の棚田，沢口の小規模な溜池湛水による谷の出口での耕地拡張，河川をせきとめた不整形溜池灌漑施設の造成による流末での耕地拡張，地割に規制された整形溜池と平野部での広域耕地化という発展過程における４つの類型化を試み，さらに荘園の土地開発にみられるような，技術的後退現象をとり上げて，そこから労働力の量や組織化の変化を測定しようとしているなど，誠に興味深い。また大和平野の場合に対照させて，薩摩入来院と備後太田庄とを辺境荘園の例として取上げ，それら荘園の耕地が谷とその出口に分布を限定されており，しかも谷奥の溜池の数が少いことを指摘しているのは，きわめて貴重な発見である。

古代から中世にかけての土地に刻まれた歴史をさぐった前半に続けて「小農村落の成立と海岸平野の開発」と題する後半部では，まず能登半島北端の名高い旧家時国家の支配した近世の村々が取り上げられる。そして平坦地にのぞんだ山ぞいの溜池がかりの豪農の田と，千枚田やそれに類する広大な，しかも灌漑施設を欠く小農の棚田との対照が，印象ぶかく描きだされる。転じて有明海を中心に海面干拓が，そして信濃川下流の越後平野を中心に治水と開拓がとり上げられてゆく。不安定な田地開墾が農民の努力によって進められたとき，村民の利害の平等を計るために，田地割替の慣行が成立したことの説明も説得的である。

多年にわたって蓄積された学殖と豊富な実地調査が，航空写真の利用という新しい手法を加えて，本書の内容を豊かなものとしている。何よりも，働く農民への深い愛情が，全篇をつらぬいているのが頼もしい。欲をいうならば，こうした事実叙述を通して，それぞれの土地への刻みつけを行なった農民の共同体的結合やそれを組織した権力の在り方との関連を説き明かしてほしかったし，特に，単に残存をさぐるにとどめることなく，ひとたび刻みこまれたものの上に加えられていった改変に眼を向けてほしかったと思う。歴史を単に過去の知識に終らせないために，この配慮は欠くべからざるものであると思うからである。

著者には新しい風土論と，その上に立った災害論への志向があるという。続編を期待して止まない。

（1967 年 10 月刊，岩波新書）